



写真：1年3組(ES) 尾崎玲音「瀬戸の夕影」
せと ゆうかげ

G
 O
 N
 T
 E
 N
 T
 S

1. 読書について 学校長 八尾 健
2. 教員・学生による推薦図書 全21編(教員11編、学生10編)
3. 読書感想文等入賞結果発表
4. 講評(高松・詫間)
5. 入賞作品紹介

《高松》読書感想文	【優 秀 賞】	電気情報工学科4年	片山 大貴
千頁読破記	【優 秀 賞】	建設環境工学科3年	荻田 綾花
夏休み体験文	【優 秀 賞】	機械電子工学科2年	岡田 朋也
《詫間》読書感想文	【グランプリ】	電子システム工学科5年	勝田 稚菜 他
エッセイ	【最 優 秀】	通信ネットワーク工学科4年	田中 那奈 他
小説	【最 優 秀】	情報工学科2年	平岡 将
短歌	【最 優 秀】	電子システム工学科3年	間部帆乃夏 他
俳句	【最 優 秀】	通信ネットワーク工学科4年	監崎 悠平 他
		高松キャンパス一般教育科	白石 希典
6. 教員によるエッセイ
7. 図書委員長より
8. 専攻科生より
9. 図書館紹介
10. 編集後記

読書について

学校長 八尾 健



学生の皆さんは調査をしたり情報を収集したりするとき、インターネットを活用していると思います。知りたい情報をすぐに手に入れることができるので、非常に便利です。私も大いに活用しています。検索を繰り返して詳しく調べることができます。関連する情報を次々に獲得していくことができます。インターネットが発明されるまでは、このようにはいきませんでした。情報を得るためには、主に本を使っていました。求める情報に到達するのが大変で、多くの時間と労力を要しました。効率の観点からは、明らかにインターネットの方が優れています。しかし、インターネットと本では、実は情報の質が異なっています。インターネットでは、関連する情報を次々に取り込むことができます。深く掘り下げて調べていくことができます。反面、関連のない情報はほとんど入ってきません。この性質から、私は「縦の情報」と呼んでいます。一方、本の場合は、関連する情報を深く調べていくには、かなりの労力を要しますが、関連はないけれども近くにある情報は容易に入ってきます。入ってくる情報が横への広がりを持つので、私は「横の情報」と呼んでいます。例えば、英語の単語を調べる場合、インターネットでは、その単語、さらにその類語と、縦方向に深く情報収集が進みます。これに対して、辞書の場合、今は辞書を使う人はほとんどいないかもしれませんが、その単語と同じページに載っている別の単語についても、情報が入ってきます。情報が横方向に広がって入ってきます。横の情報は、その時には必要がないかもしれませんが、すぐには役立たないかもしれませんが、しかしこれは知識となって、記憶に残ります。そして、知恵を形成していきます。知識や情報を現実においてどのように実践するのか、そこに知恵が必要です。知恵を働かせることにより、初めて知識や情報を活かすことが出来るのです。

本の選択に制約はありません。面白い本、人生を考えさせる本、生活に役立つ本、勇気を与える本、何でも構いません。規則はありません。「横の情報」を広げるという意味で、幅広く読書することを勧めます。本を選ぶとき、完璧を目指す必要はありません。選んだ本の3割が気に入れば上出来です。野球でも打率が3割あれば、リーディングヒッターです。10割の成功を目指すすと、失敗を

恐れて結局何もできなくなります。3割うまくいけばいいのです。何事であれ、新しくチャレンジをするときは、これでいいのです。3割でなくても、2割でも、1割でも十分です。見方を変えると、リーディングヒッターといえども、7割は安打になっていないのです。うまくいっていない時の方が、うまくいった時よりも2倍以上多いのです。読みはじめてみたら、期待どおりではなかった。こういうことはよくあります。その時は、読んでいる途中でも構わないので、すぐ次の本にチャレンジしましょう。チャレンジを繰り返していけばいいのです。期待にそぐわなかった本は、しかし、すぐ放棄してしまうのではなく、頭の中には残しておきましょう。また日がたつと、読んでみたくなることもあるからです。その意味では、1冊に集中するのではなく、2冊、3冊と、同時並行に読んでいくのもいいでしょう。また、本の一番最初からではなく、途中から読み始めるというの構いません。さらには、私は辞書を読んだりしましたが、その時は、ランダムに本を開いてそこを読む、ということをやりました。私はこれを、「ランダム読書」と名付けています。読み方にも、制約はありません。各人の流儀で、いろいろな本にチャレンジしていくのが良いでしょう。

最後に、残りの紙面の許す限り、推薦する本をコメント付きで紹介したいと思います。

徳川家康：小領主から苦労を重ねて天下を取った徳川家康に、著者山岡荘八は終戦後の日本の復興を託した。歴史小説でありながら、強い政治色を持つ。

君主論：マキャベリ本人は、マキャベリズムとは最も縁遠い、非常に真面目で、むしろ小心な人間である。とても君主にはなり得ない人間が、「君主とは？」を論じたのである。

史記列伝：劉邦は項羽よりも人望があったから、漢帝国が成立した、と一般に信じられている。しかし事實は韓信の優柔不断によるということができる。

武則天：則天武后（武則天）は、唐の悪名高い皇后として知られている。彼女は、唐を廃止し、周を建国した。唐は一時滅んだ。しかし彼女は悪者ではない、本当の姿は、合理的で賢い女性である、というのが本書である。彼女はすさまじい権力闘争を勝ち抜き、実権を握っていく。小説というよりは、ほとんど史実が描かれていると言って良い。著者の原百代は、これが最初の著作であり、そして執筆完了後すぐに亡くなった。

老子：難解。人によって、また同じ人でも年齢によって、受け取り方が異なってくる。人が存在する空間と時間を的確に洞察している、味わい深く、そして味わい尽くせない内容。



教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

教員〈高松〉

使える脳の鍛え方 成功する学習の科学

▶ピーター・ブラウン他(著)(NTT出版)

勉強はしているのに、思うように成績が伸びないと悩んでいる人はいませんか？もしかしたら、勉強の仕方が間違っているのかもしれないよ。この本には、「テストは記憶の定着に役立つ」、「集中学習よりも分散学習」、「簡単では効果がない」、「知っているが錯覚しない」などなど、これまでの学習法の研究によって分かってきた効率的に勉強する方法がたくさん書かれています。この本を読んで、非効率的な試験前の一夜漬けから脱出しましょう。

機械工学科教員 橋本 良夫

デッドライン - ソフト開発を成功に導く101の法則 -

▶トム・デマルコ(著) 伊豆原 弓(訳)(日経BP社)

この本を一言で表すと硬い「もしドラ」です。ソフトウェア輸出国を目指す国家に拉致された主人公が、6個のソフトウェアを各3チームずつ計18プロジェクトで開発するという一部の人にとっては夢のような「プロジェクト管理実験室」でマネジメントを行うことになり、各プロジェクトを進める中で、様々な法則を見つけていくという内容です。少し専門用語が出てきて、情報系の用語も少し古いですが、小説としても面白く読めます。

電気情報工学科教員 柿元 健

ローマ人の物語

▶塩野 七生(著)(新潮社)

大帝国を築いた古代ローマの1000年間の歴史について、文庫版全43巻にわたり、一つの物語としてとても読みやすく記されています。物語としても面白いのですが、とくに土木を学んでいる学生に、インフラの整備という観点から読んでもらいたい1冊です。古代ローマが大帝国を築いた裏には、現代にも通じるインフラ整備の技術があります。現代のインフラ整備や建設材料は、文字通り「すべての道はローマに通ず」を体現していることがわかんと思います。

建設環境工学科教員 長谷川 雄基



高校数学でわかるボルツマンの原理

▶竹内 淳(著)(講談社ブルーバックス)

熱力学と並んで統計力学は物理学として重要な分野であり工学の根幹となるものですが、対象が抽象的であるために理解としては今ひとつになりがちです。本書では難関な数式を極力避けて高校レベルの数学で理解できるように執筆された熱力学と統計力学の入門書です。秋の夜長は熱力学と統計力学の橋渡しであるボルツマンの原理 $S = k_B \log W$ に挑戦するのはいかがでしょうか？

機械電子工学科教員 相馬 岳

「からくり設計」メカニズム定石集

▶熊谷 英樹(著)(日刊工業新聞社)

巧みな動きをする機械装置を設計したいとき、知っている役立つ基本メカニズム(からくり)を図面とイラストと写真でわかりやすく解説した良書です。主要なメカニズムの要所が具体的に記述されており、ページを開いて眺めるだけでも楽しめます。ロボット作りや新しい機器の開発研究で苦心している皆さん、もしかすると簡単な仕組みで望みの動作や運動を実現できるかもしれませんよ。

機械電子工学科教員 平岡 延章

心の持ち方 完全版

▶ジェリー・ミンチントン(著)(ディスカヴァー・トゥエンティワン)

“ポジティブ思考ができれば、どれだけ楽になれるだろう。” “いつも自信に満ち溢れた生き方ができればなあ。” 日頃、ネガティブ思考の強い私はよく思います。この本は、そうした生きづらさを感じている人に“癒し”と“勇気”を与えてくれる92個の魔法の言葉がぎっしり詰まっています。最初から読み進めてもいいし、気になる項目だけを読んでかまいません。人生を楽しむ処方箋がきっと見つかると思います。

一般教育科教員 田口 淳

教員〈詫間〉

虹 その文化と科学

▶西條 敏美(著)(恒星社厚生閣)

虹にはなぜという疑問がいくつもあります。タイトルに「その文化と科学」とあるように、前半では、虹の語源と発音から神話や伝説など、文化的な側面を扱い、後半では、数学を基礎とした科学的側面で虹の現象を説明しています。虹を理解するには、高専で学ぶ数学や物理の知識も必要になってくることがわかります。虹に興味を持ってみませんか。

通信ネットワーク工学科教員 澤田 士朗

スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン

▶カーマイン・ガロ(著) 井口 耕二(訳)(日経BP社)

スティーブ・ジョブズのプレゼンはなぜ魅力的なのか? どうすればそれをマネできるのか? 「PowerPointを開く前に紙と鉛筆でストーリーを考える」、「敵役と正義の味方を登場させる」、「専門用語を捨てシンプルな言葉を使う」など、人々を魅了するプレゼンを作り上げるために重要なポイントが具体的に書かれています。ジョブズの異常とも思えるほどのプレゼンへのこだわりがひしひしと伝わってきて読み物としてもとてもおもしろい本です。

電子システム工学科教員 岩本 直也

図書館の魔女

▶高田 大介(著)(講談社)

キラヒト。この言葉とその響きから何を想像しますか? 初めてその言葉を目にしたとき私はどこか澄んだ、冷たい印象を持ちました。そしてそれは当たっていました。図書館の魔女・マツリカの手話を代弁する少年の名前であり名前ではありません。「図書館の魔女」という本は、ファンタジーです。剣も槍も出てきます。でも魔法はありません。そのかわり言葉が出てきます。何気ない会話の裏に意味が潜んでいます。読み飛ばさず丁寧に読みたい本です。

情報工学科教員 篠山 学

細雪

▶谷崎 潤一郎(著)(中央公論新社)

「名作のはまれ高くみんな名前は知っているが読んだことはない」という日本文学のトップ10に入る作品ではないか? 実は私も60過ぎるまで読んだことがなかった。読んで改めて文体が文学にとってどんな意味を持つか思い知った。何も起こってないような、何かが起こっているような長い物語、その背景にある暗い逼塞した時代、その2つを書き上げるのに谷崎が選んだワンセンテンスが長い饒舌体。他の谷崎作品とは全く違います。唸りました。引き込まれました。付録ながら、初期の川上未映子の饒舌体はこの作品の影響下にあるのでは? 細雪の文体に匹敵するのは、知る限り Faulkner の The Bear の文体くらいだと思う。こいつはピリオドを見つけるのに数ページ読み進まなければならぬが。

一般教育科教員 出淵 幹郎

死の棘

▶島尾 敏雄(著)(新潮社)

抱擁家族

▶小島 信夫(著)(講談社)

吉本隆明が日本で最も偉大な2人の作家と讃えた、島尾敏雄と小島信夫の代表作(その人たち一体誰?と言わないで!)。島尾の本は、突き詰めに突き詰めた人対人の格闘で、読めばドロドロになるがカタルシスもある矛盾の世界である。小島の本は我々の現実や思考や感覚や言葉を18°くらい回転させた世界が展開され、読めば何やら気色悪い心持ちになるが我々が暮らす現実世界のことを改めて考えさせられる。

一般教育科教員 出淵 幹郎

学生〈高松〉

永遠の0

▶百田 尚樹(著)(講談社)

私がおすすめしたい本は、「永遠の0」です。「永遠の0」は主人公が太平洋戦争で戦死した祖父の軌跡を辿りながら、当時の祖父を知る戦友たちに会い、戦争の体験談を聞き、祖父の死の真相をつきとめようとする物語です。なぜ、祖父は死ななければならなかったのか。戦争はどれだけ悲惨なものなのか。いろいろと考えさせられる一冊です。みなさんもぜひ、読んでみてはいかがでしょうか。

1年4組(CV) 片山 大意

幼女戦記

▶カルロ・ゼン(著)(KADOKAWA)

社会的弱者、中でも少女とはとてもか弱く守らなければならない存在である。そんな少女が軍人となって戦場という死地を操っているのである。これは少女である。指令に従わない部下を処刑していても少女である。これは少女ですか? 少女です。

うわようじょつよい。

機械工学科2年 小比賀 航成

単位171の新知識

▶星田 直彦(著)(講談社)

この本は物理学を学ぶ本のシリーズの一冊で、単位にスポットライトを当てた作品になっています。

内容としては、単位の成立から変遷までを初めに説明し、それらを踏まえうえでタイトルにあるとおり171種類の単位について深く掘り下げてくれています。

単位はどの科目でも使う重要なものです。この本をとおして改めて単位について考えてみるのも良いと思います。

機械電子工学科3年 竹内 悠

ツバキ文具店

▶小川 糸(著)(幻冬舎)

先代の跡を継ぎ、文具店と代筆屋を営む主人公。鎌倉で出会った温かい人々に支えられ、様々な依頼の手紙を書きながら一人前の代筆屋に成長していく物語です。途中ででてくる実際の手紙を含め、手紙を書く、出す、相手に届く...という工程の温かさがわかる素晴らしい作品です。読み終わると幸せな気持ちになり、誰かに手紙を書きたくなると思います。

電気情報工学科4年 片山 理沙



ダイ・ハード4.0 (名作映画完全セリフ集スクリーンプレイ・シリーズ)

▶ 岡崎 弘信 (監修) (フォーインスクリーンプレイ事業部)

皆さんは英語が好きですか？僕は好きです。しかし、教科書の英語はあまり好きではありません。なぜかって、つまらない上に無難な英語しか載っていないからです。もちろん基礎的な文法や語彙は大事ですが、実際には教科書には載っていない(載せられない)英語も必要になることがあるのです。この本にはアクション映画ダイ・ハード4.0の全てのセリフの英文とその和訳文が載っています。いわゆるフォーレターワードなどの悪いセリフや難解な略語も多いですが、その分刺激的な英語が楽しめると思います。

機械工学科5年 富田 想

学生〈読間〉

伊達政宗(人物叢書)

▶ 小林 清治 (著) (吉川弘文館)

私は小学生の頃戦国時代の人物の伝記を読むのが好きで、たくさんの人物の伝記を読みました。その中で伊達政宗の伝記を読んだことがなかったので、今回この原稿を書くための本に伊達政宗の伝記を選びました。

伊達政宗はとても利発であり「不動明王はなぜこのように恐い容貌なのか、私は柔和なものであるというのに」と疑問を持つなど繊細な性格でもありました。しかし、繊細であるあまり少し恥ずかしがりな一面もあったらしく、母親や家臣からはあまり期待されず、苦しい少年時代を送ったようです。

しかし政宗は家統制の徹底、戦い方の工夫によって戦果を挙げ、母親を見返すことに成功します。ここで凄いなと思ったのが部下への接し方です。敵軍だった人間の重臣に対しても約束に従い、差別することなく恩賞を与えたりするなどしていたらしく、とても懐の深い人物だったということが分かります。

自分の過去の苦しい思いを言い訳にして逃げ出さず、目の前の脅威に、工夫しながら立ち向かっていく様は見習わねばならないと思いました。

通信ネットワーク工学科5年 石井 宏武

椿姫

▶ アレクサンドル・デュマ・フィス (著) 朝比奈 弘治 (訳) (新書館)

パリに住む青年アルマンは1人の高級娼婦、マルグリットに恋をした。友人に紹介してもらいマルグリットに思いを告白した。マルグリットはアルマンの気持ちにはじめはとまどっていたが彼の誠実さに心引かれていき、2人は相思相愛の仲になっていった。パリ郊外の家に住み楽しい時を過ごしていた2人だったがそこへ噂を聞きつけたアルマンの父がやってきて…。

おどろくことにこの作品は作者のデュマ・フィスの実体験をもとに書かれており、登場人物にはモデルが存在している。例えば、マルグリットは、マリー・デュプレシーという女性がモデルであり、肖像画もある。また、出版と同時に大変な人気となり、舞台、パレエ、映画、オペラと何度も焼きなおされている作品である。是非読んでみたい。

電子システム工学科5年 森 由有也

詳解LINUXカーネル

▶ Daniel P.Bovetほか (著) 岡島 順治郎ほか (訳) (オライリー・ジャパン)

私がこの本を読んだのは、4年生でシステムプログラミングを受講し、Linuxカーネルとシステムプログラミングに興味を持ったからです。この本は、オペレーティングシステムの基礎や各種CPUのアーキテクチャの説明にはじまり、Linuxの概要、メモリアドレッシング、プロセス、割り込みと例外…と各章がとても詳しく解説されています。概念の説明が非常に丁寧で、そのあとに、Linuxカーネルでの実装方法、ほかのカーネルでの実装方法が述べられています。また、ハードウェアに依存する部分についても踏み込んだ解説がしてあります。読間キャンパスの学生は、全員C言語の勉強と演習をしますが、読み進めていくにつれて、コンパイルされた実行ファイルがどのように実行されているのか、などの事柄がしっかり理解できると思います。また、プロセス間通信やファイルシステムに関する解説もあり、Linux環境でのソフトウェアはもちろん、その環境以外でのソフトウェア開発にも応用できると思います。分量があり、内容も難しい箇所があるので、読むのは大変ですが、非常におすすめです。

情報工学科5年 小松 聖矢

燃えよ剣

▶ 司馬 遼太郎 (著) (新潮文庫)

司馬遼太郎は日本を代表する歴史作家だ。氏は『龍馬がゆく』や『関ヶ原』などで日本人の歴史に対するイメージを形成した。

『燃えよ剣』はその司馬作品の中でも高く評価されている作品の1つだ。土方歳三の一生を、新撰組の発足から箱館政府の終わりまでをみごとに書いた歴史小説の中でも白眉の作品だ。この小説の素晴らしい点は2つある。

まず、わかりにくかった幕末から明治を脚色を加えながらわかりやすく書いている点だ。他の時代に比べ、幕末は様々な派閥や組織が現れて複雑だ。しかしこの作品を読めば、大まかな流れをつかむことができる。

次に、「新撰組」というブランドをつくった点だ。後の作品の新撰組のイメージはこの作品でつくられたと言っても過言ではない。特に主人公の土方歳三は、この作品からとても人気を博すようになった。

昨今の歴史ブームで興味を持った人や、アニメやゲームで新撰組が好きになった人にはぜひ読んでほしい一冊だ。

電子システム工学科5年 白川 智輝

パプリカ

▶ 筒井 康隆 (著) (中央公論社)

この作品はアニメ映画化されています。友人に面白いよと薦められたため借りてみました。ジャンルはSF小説で、内容は、夢を共有する機械「DCミニ」というものが登場するのですが、それを盗まれて悪用され、その犯人を探すというものです。とにかく表現？話しの組み立て方？が上手だと思います。読みながらハラハラドキドキできる物語となっています。ぜひ読んでみてください。

情報工学科4年 石橋 遼樹